

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		授業番号 DA100003
旧約聖書文学特殊研究 a	田中 光	＜担当形態＞ 単独
前期・2単位	＜登録条件＞	
＜学位授与方針との関係＞ [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
＜授業のテーマ＞ 詩編の解釈。		
＜到達目標＞ 詩編の言葉を原点や諸翻訳（古代語訳含む）によって丁寧に読み、その神学的メッセージを理解すること。ドクターの学生は特に、二次文献の深い読み取りと、自身に固有の神学的理解を確立することが求められる。		
＜授業の概要＞ 各詩編を次のようなプロセスで読解していく。①詩編のヘブライ語原典の内容を精読し、本文批評的問題を BHS のアパラタスその他によって確認する。②注解書その他によりながら、詩編の類型、歴史的背景、神学的メッセージなどについて討論する。		
＜履修条件＞ ヒブル語の講義を受講して基礎文法を習得していることが望ましい。		
＜授業計画＞ 第1回 オリエンテーション&イントロダクション（+詩編総論①） 第2回 詩編総論② 第3回 詩編1編① 原典の講読 第4回 詩編1編② 解釈に関する討論 第5回 詩編2編① 原典の講読①（前半部分） 第6回 詩編2編② 原典の講読②（後半部分） 第7回 詩編2編③ 解釈に関する討論 第8回 詩編3編① 原典の講読 第9回 詩編3編② 解釈に関する討論 第10回 詩編4編① 原典の講読 第11回 詩編4編② 解釈に関する討論 第12回 詩編5編① 原典の講読①（前半部分） 第13回 詩編5編② 原典の講読②（後半部分） 第14回 詩編5編③ 解釈に関する討論 第15回 全体の振り返りとまとめ		
＜準備学習等の指示＞ 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 事前に指示された予習（ヒブル語テキストの読解や参考書の読解）をきちんと行って授業にのぞむこと。特に、ドクターの学生は、事前にヒブル語原典の文法的特徴をより深く理解し、ディスカッションのために様々な外国語の注解書を積極的に読んで準備してくることが求められる。		
＜テキスト＞ 特に定めないが、毎回 BHS とヒブル語の辞書を持参すること。		
＜参考書・参考資料等＞ 初回授業にて指示する。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 各授業における予習・参加の度合いと、期末のペーパー（6000字程度）によって評価する。評価は「共通評価指標」（1）に基づいて行う。		
＜課題に対するフィードバックの方法＞ 各授業での予習に対して口頭でコメントする。併せて、期末のペーパーにコメントを付して返却する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		授業番号 DA100004
旧約聖書文学特殊研究 b	田中 光	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> ヤコブ物語の解釈。		
<到達目標> ヤコブ物語が持つ神学的意味について深い洞察を獲得すること。ドクターの学生は特に、二次文献の深い読み取りと、自身に固有の神学的理解を確立することが求められる。		
<授業の概要> ヤコブ物語を、ヒブル語原典を参照しつつ、どのように解釈するのが相応しいのかを、様々な観点から（歴史批評的観点、解釈史的観点）から討論する。		
<履修条件> ヒブル語を履修していることが好ましい。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション&イントロダクション 第2回 創世記概説 第3回 創世記 28 章 10-15 節 原典講読 第4回 創世記 28 章 16-22 節 原典講読 第5回 創世記 28 章 10-22 節 解釈に関する討論（歴史批評的観点＋解釈史的観点） 第6回 創世記 29 章 1 節-32 章 1 節 解釈に関する討論（歴史批評的観点＋解釈史的観点） 第7回 創世記 32 章 23-32 節 原典講読 第8回 創世記 32 章 23-32 節 歴史批評的観点からの解釈に関する討論 第9回 創世記 32 章 23-32 節 解釈史の観点からの解釈に関する討論 第10回 創世記 33 章 1-11 節 原典講読 第11回 創世記 33 章 12-19 節 原典講読 第12回 創世記 33 章 1-19 節 解釈に関する討論（歴史批評的観点＋解釈史的観点） 第13回 創世記 35 章 1-8 節 原典講読 第14回 創世記 35 章 9-15 節 原典講読 第15回 創世記 35 章 1-15 節 解釈に関する討論（歴史批評的観点＋解釈史的観点）		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 事前に指示された予習（ヒブル語テキストの読解や参考書の読解）をきちんと行って授業にのぞむこと。特に、ドクターの学生は、事前にヒブル語原典の文法的特徴をより深く理解し、ディスカッションのために様々な外国語の注解書を積極的に読んで準備してくることが求められる。		
<テキスト> 特に定めない。		
<参考書・参考資料等> 初回授業にて指示するが、ドクターの学生には、解釈史について深い理解を得るために、次の文献を参照することを勧める。但し、必ずしも購入の必要はない。James L. Kugel, <i>Traditions of the Bible: A Guide to the Bible as it was at the Start of the Common Era</i> (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1998).		
<学生に対する評価（方法・基準）> 毎回の授業に対する予習と、期末レポート（6000字程度）によって評価する。評価は共通評価指標（1）に基づいて行う。		
<課題に対するフィードバックの方法> 予習に対して口頭でコメントし、期末レポートにコメントを付して返却する。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		授業番号 DA100007
聖書語学特殊研究 a	佐藤 泉	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 旧約聖書原典の一部はアラム語で書かれており、古代訳の中にはアラム語訳旧約聖書のタルグムがある。そのようなアラム語のテキストを読むためのアラム語文法の基礎を学ぶ。マソラテキストとタルグムの比較を行う基礎を養う。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行う。		
<到達目標> ①アラム語文法の基礎を身につける。②身につけたアラム語文法の基礎を生かし、辞書も使いながら、聖書のアラム語のテキストや古代訳の一つであるタルグムを読むことができるようになる。③マソラテキストとタルグムや七十人訳等の古代訳との比較を行えるようになる。		
<授業の概要> 聖書のアラム語のテキストを実際に読みながら（創世記31：47・エレミヤ10：11・エズラ4：8－24・5：1－17など）、アラム語文法を学ぶ。聖書の原典と古代訳との比較に慣れていく。		
<履修条件> ヒブル語履修済みであること。また、七十人訳等の古代訳との比較も行うので、ギリシア語等の文法の基礎を身につけていることが望ましい。		
<授業計画> 第1回：序 アラム語について、言語グループ、時代区分などを話す。 第2回：創世記31：47を読みつつ、アラム語の名詞・形容詞を学ぶ。 第3回：エレミヤ10：11を読みつつ、動詞のPeal形の完了・未完了を学ぶ。 第4回：エズラ4：8－24の講読(1) 不規則変化の名詞について学ぶ。 第5回：エズラ4：8－24の講読(2) 動詞のHapel形の完了を学ぶ。 第6回：エズラ4：8－24の講読(3) 動詞のPeal形の分詞、Hitpeel形の完了・未完了を学ぶ。 第7回：エズラ4：8－24の講読(4) 動詞のPael形の完了・未完了、Hapel形の未完了を学ぶ。 第8回：エズラ4：8－24の講読(5) 動詞のHapel形の分詞を学ぶ。 第9回：エズラ4：8－24の講読(6) 動詞のPael形・Hitpeel形・Hitpaal形の分詞を学ぶ。 第10回：エズラ4：8－24の講読(7) 二根字動詞のPeal形と動詞の不定詞・命令法を学ぶ。 第11回：エズラ5：1－17の講読(1) 前置詞と代名詞語尾を学ぶ。 第12回：エズラ5：1－17の講読(2) 二根字動詞のHapel形を学ぶ 第13回：エズラ5：1－17の講読(3) 二根字動詞のHitpeel形を学ぶ。 第14回：エズラ5：1－17の講読(4) Pê Yôd 動詞の変化を学ぶ。 第15回：エズラ5：1－17の講読(5) Pê Nûn 動詞の変化を学ぶ。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 講読箇所として指示されているアラム語テキストについて、できる範囲で準備すること。講読箇所について、マソラテキストのアパルトゥスや七十人訳等の古代訳にも注意を払うこと。		
<テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia ; Biblia Hebraica Quinta –20– Ezra and Nehemiah ; Franz Rosenthal, A Grammar of Biblical Aramaic, Harrassowitz Verlag・Wiesbaden, 1995, Sixth, revised edition （テキストについては初回授業時に担当者が説明する。）		
<参考書・参考資料等> 左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011 ; William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971 ; Gustaf Dalman, Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, Darmstadt : Wissenschaftliche Buchgesellschaft , 1960 ; Gustaf Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch, Göttingen : E. Pfeiffer , 1938 ; Marcus Jastrow, A dictionary of Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic literature v1, v2, New York: Pardes, 1950		
<学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況、講読箇所に関する発表、(講読箇所以外の) 聖書のテキストの中から指定された箇所の発表（あるいはレポート提出）、単語等に親しむための小テスト等によって成績をつける。なお、評価にあたっては、「共通評価指標：講義・演習」の①～④の内容を重視する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 講読箇所の発表等の後には授業の中で解説等をする。		

聖書神学専攻・旧約聖書神学関係		授業番号 DA100008
聖書語学特殊研究 b	佐藤 泉	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 旧約聖書原典の一部はアラム語で書かれており、古代訳の中にはアラム語訳旧約聖書のタルグムがある。そのようなアラム語のテキストを読むためのアラム語文法の基礎を学ぶ。マソラテキストとタルグムの比較を行う基礎を養う。さらに聖書の原典と古代訳との比較を行う。		
<到達目標> ①アラム語文法の基礎を身につける。②身につけたアラム語文法の基礎を生かし、辞書も用いながら、聖書のアラム語のテキストや古代訳の一つであるタルグムを読むことができるようになる。③マソラテキストとタルグムや七十人訳等の古代訳との比較を行えるようになる。		
<授業の概要> 聖書のアラム語のテキストを実際に読みながら（ダニエル書）、アラム語文法の学びを継続する。さらに、エレミヤ書などのタルグムの講読、聖書の原典と古代訳との比較もする。（箇所は未定。授業中に指示する。）		
<履修条件> ヒブル語履修済みであること。また、七十人訳等の古代訳との比較も行うので、ギリシア語等の文法の基礎を身につけていることが望ましい。		
<授業計画> 第1回：ダニエル書の緒論的知識を確認し、前期の文法の復習をしつつ、ダニエル書の講読に備える。 第2回：ダニエル書の講読(1) Pê' ālep 動詞の Peal 形を学ぶ。 第3回：ダニエル書の講読(2) Pê' ālep 動詞の Hapel 形を学ぶ。 第4回：ダニエル書の講読(3) 動詞の変化で音位転換が起こる場合について学ぶ。 第5回：ダニエル書の講読(4) Lamed' ālep・Lamed Hê 動詞の変化を学ぶ。 第6回：ダニエル書の講読(5) 二重' ayin 動詞の Peal 形を学ぶ。 第7回：ダニエル書の講読(6) 二重' ayin 動詞の Hopal 形を学ぶ。 第8回：ダニエル書の講読(7) 代名詞語尾付きの動詞の変化を学ぶ。 第9回：ダニエル書の講読(8) 喉音を含む動詞について学ぶ。 第10回：ダニエル書の講読(9) 特殊な変化をする動詞について学ぶ。 第11回：エレミヤ書などの緒論的知識とバビロニア方式の母音記号を確認し、タルグムの講読に備える。 第12回：タルグムの講読(1) バビロニア方式の母音記号で読むことに慣れる。 第13回：タルグムの講読(2) タルグムのアラム語の動詞の変化を学ぶ。 第14回：タルグムの講読(3) アラム語文法を全体的に思い出しつつ読む。 第15回：タルグムの講読(4) 原典や七十人訳と比較しつつ読むことを味わう。		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 講読箇所として指示されているアラム語テキストについて、できる範囲で準備すること。講読箇所について、マソラテキストのアパルトゥスや七十人訳等の古代訳にも注意を払うこと。		
<テキスト> Biblia Hebraica Stuttgartensia；The Pentateuch according to Targum Onkelos；The Former Prophets according to Targum Jonathan；The Latter Prophets according to Targum Jonathan；Franz Rosenthal, A Grammar of Biblical Aramaic, Harrassowitz Verlag・Wiesbaden, 1995, Sixth, revised edition （テキストについては初回授業時に担当者が説明する。）		
<参考書・参考資料等> 左近義慈編著、本間敏雄改訂増補『ヒブル語入門』[改訂増補版] 教文館、2011；William L. Holladay, A Concise Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament, Grand Rapids, 1971；Gustaf Dalman, Grammatik des jüdisch-palästinischen Aramäisch, Darmstadt：Wissenschaftliche Buchgesellschaft，1960；Gustaf Dalman, Aramäisch-Neuhebräisches Handwörterbuch, Göttingen：E. Pfeiffer，1938；Marcus Jastrow, A dictionary of Targumim, the Talmud Babli and Yerushalmi, and the Midrashic literature v1, v2, New York: Pardes, 1950；Theodore H. Robinson, Paradigms and Exercises in Syriac Grammar, 3 rd .ed., Oxford University Press, London, 1949.；Theodor Nöldeke, Compendious Syriac Grammar, Winona Lake, Indiana: Eisenbrauns, 2001.；J. Payne Smith, A compendious Syriac dictionary：founded upon the Thesaurus Syriacus of R. Payne Smith, Winona Lake, Ind.：Eisenbrauns，1998.		
<学生に対する評価（方法・基準）> 予習・復習、積極的な授業参加の状況、講読箇所の発表、（講読箇所以外の）アラム語のテキストの中から指定された箇所に関する発表（あるいはレポート提出）、単語等に親しむための小テスト等によって成績をつける。なお、評価にあたっては、「共通評価指標：講義・演習」の①～④の内容を重視する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 講読箇所の発表等の後には授業の中で解説等をする。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		授業番号 DA200001
新約聖書神学特殊研究 a	河野 克也	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 福音書研究の重要な主題として共観福音書問題を取り上げる。		
<到達目標> 共観福音書問題の研究史についての基礎的な理解を深め、実際に共観福音書間の異同を詳細に検討することによってこの問題の解決についての可能性を探るとともに、個々の福音書の解釈と有機的に関連づけることを目指す。		
<授業の概要> 共観福音書問題について研究史と主要な解決案を概観し、重要な箇所の事例研究を行う。		
<履修条件> 新約聖書ギリシア語、新約聖書釈義の履修を終えていること。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション：共観福音書問題への関心（共観福音書問題の迷路？） 第2回 共観福音書問題概観 ①（迷路に入る：Part 1） 第3回 共観福音書問題概観 ②（迷路に入る：Part 2） 第4回 共観福音書問題概観 ③（迷路を探索する：Part 1） 第5回 共観福音書問題概観 ④（迷路を探索する：Part 2） 第6回 マルコ福音書の先発性 ①（マタイおよびルカとの関係性） 第7回 マルコ福音書の先発性 ②（福音書の成立年代と時代背景） 第8回 マルコ福音書の先発性の意義 ①（編集史および史的イエス研究） 第9回 マルコ福音書の先発性の意義 ②（本文批評） 第10回 Q 仮説（二資料説の根拠の確認） 第11回 Q 抜きマルコ優先説 ①（Q 仮説の論拠への反論：Part 1） 第12回 Q 抜きマルコ優先説 ②（Q 仮説の論拠への反論：Part 2） 第13回 Q 抜きマルコ優先説 ③（ルカによるマタイの使用） 第14回 共観福音書問題の解決と展望（迷路を抜ける） 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 事前に指定の課題図書を読み、事例研究の箇所について検討しておくこと。英書にも目を通しておくこと。		
<テキスト> ・ Nestle=Aland 28th/UBS 5th のギリシア語新約聖書 ・ 佐藤研（編訳）『福音書共観表』（岩波書店、2005年）※品切・重版未定のため入手困難な場合は担当者がプリントを用意する その他、授業において資料を配布する。		
<参考書・参考資料等> Mark Goodacre, <i>The Synoptic Problem: A Way Through the Maze</i> (London: T&T Clark, 2001); Stanly E. Porter and Bryan R. Dyer (eds.), <i>The Synoptic Problem: Four Views</i> (Grand Rapids: Baker Academic, 2016).		
<学生に対する評価（方法・基準）> 出席が2/3に足りない場合は、成績評価の対象外とする。授業への積極的な参加と期末レポートにより評価する。 レポートは6,000字以上とする。評価にあたっては、共通評価指標(1)に基づいて評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> コメントを付して返却する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		授業番号 DA200002
新約聖書神学特殊研究 b	河野 克也	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 新約聖書における「贖い」		
<到達目標> 「贖い」について新約聖書の多様な証言を検討し、理解を深める。		
<授業の概要> 新約聖書の「贖い」の背景として旧約聖書の犠牲祭儀を詳細に検討し、その新約聖書における展開を検討する。		
<履修条件> 新約聖書ギリシア語、新約聖書釈義の履修を終えていること。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション：「贖罪論」をめぐる近年の論争について 第2回 「贖罪論」と「イエスの犠牲」概念 第3回 ヘブライ語聖書の背景 ①（犠牲祭儀をめぐる諸理論） 第4回 ヘブライ語聖書の背景 ②（ヘブライ語聖書における犠牲祭儀） 第5回 ヘブライ語聖書の背景 ③（ヘブライ語聖書における聖所の意義） 第6回 ヘブライ語聖書の背景 ④（多様な犠牲祭儀：焼かれる献げ物） 第7回 ヘブライ語聖書の背景 ⑤（多様な犠牲祭儀：穀物の献げ物と幸福の犠牲） 第8回 ヘブライ語聖書の背景 ⑥（多様な犠牲祭儀：浄罪の献げ物と賠償の献げ物） 第9回 ヘブライ語聖書の背景 ⑦（多様な犠牲祭儀：追放儀礼とメタファー的用法） 第10回 ヘブライ語聖書の背景 ⑧（まとめ） 第11回 新約聖書における「イエスの犠牲」①（犠牲イエス：Part 1） 第12回 新約聖書における「イエスの犠牲」②（犠牲イエス：Part 2） 第13回 新約聖書における「イエスの犠牲」③（その他のキリスト論的メタファー） 第14回 新約聖書における「イエスの犠牲」④（まとめ） 第15回 全体のまとめとディスカッション		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 英書を含め、事前に指定された課題図書を読み、ディスカッションに参加できるように用意しておくこと。		
<テキスト> ・Christian A. Eberhart, <i>The Sacrifice of Jesus: Understanding Atonement Biblically</i> (Minneapolis: Fortress, 2011) [2025年前半に邦訳出版予定]。 ・河野克也「贖い」「犠牲」、『聖書神学事典』（いのちのことば社、2010年）[コピーを授業で配布する]。 ・河野克也「修復的贖罪論の可能性を探る」 ・西岡義行（編）『平和をつくり出す神の宣教』（東京ミッション研究所、2020年）、第3章：103-130頁 [コピーを授業で配布する]。		
<参考書・参考資料等> Stephen Finlan, <i>Problem with Atonement</i> (Collegeville: Liturgical Press, 2005); idem, <i>Options on Atonement in Christian Thought</i> (Collegeville: Liturgical Press, 2007). Joel B. Green, “Theologies of Atonement in the New Testament,” in Adam J. Johnson (ed.), <i>T&T Clark Companion to Atonement</i> (London: T&T Clark, 2017), pp. 115-34. 浅野淳博『死と命のメタファー』（新教出版社、2022年）。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 出席が2/3に足りない場合は、成績評価の対象外とする。授業への積極的な参加と期末レポートにより評価する。 レポートは6,000字以上とする。評価にあたっては、共通評価指標(1)に基づいて評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> コメントを付して返却する。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		授業番号 DA200003
新約聖書原典特殊研究 a	遠藤 勝信	＜担当形態＞ 単独
前期・2単位	＜登録条件＞ 通年（a, b）の登録が望ましい。	
＜学位授与方針との関係＞ [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
＜授業のテーマ＞ ヨハネによる福音書 4：46～5：47 の原典釈義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。		
＜到達目標＞ 学生が、テキストと真摯に向き合う姿勢を学びつつ、聖書釈義の方法を修得する。		
＜授業の概要＞ はじめに近年のヨハネ福音書研究の動向（研究史、方法論）を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学び合う。		
＜履修条件＞ 新約ギリシャ語原典テキスト読解力を有すること。ギリシャ語中級文法の知識があることが望ましい。		
＜授業計画＞ I. 講義を中心に 第01回 研究史を概観し、近年の研究状況と釈義の諸問題を学ぶ。 第02回 ギリシャ語新約聖書本文批評の実際。 第03回 テキストの文法解釈の実際。 第04回 テキストの文学批評の実際。 第05回 テキストと歴史批評の実際。 第06回 ヨハネ1～4章の概要 II. 演習(参加者による釈義の発表とディスカッション)を中心に 第07回 ヨハネ04：46～54の原典釈義（その1：釈義と解釈） 第08回 ヨハネ05：01～09の原典釈義（その2：釈義と解釈） 第09回 ヨハネ05：09～18の原典釈義（その3：釈義と解釈） 第10回 ヨハネ05：19～24の原典釈義（その4：釈義と解釈） 第11回 ヨハネ05：25～29の原典釈義（その5：釈義と解釈） 第12回 ヨハネ05：30～36の原典釈義（その6：釈義と解釈） 第13回 ヨハネ05：37～40の原典釈義（その7：釈義と解釈） 第14回 ヨハネ05：41～47の原典釈義（その8：釈義と解釈） 第15回 総括		
＜準備学習等の指示＞ 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 クラスで取り上げる新約聖書テキストをギリシア語文法に則して読み、釈義の問題点を明確にしてクラスに出席すること。		
＜テキスト＞ Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i> 各自で購入のこと。		
＜参考書・参考資料等＞ R・ブルトマン著、杉原助訳『ヨハネの福音書』、2005年 R・A・カルペッパー著、伊東寿泰訳『ヨハネ福音書文学的解剖』2005年 R・ボウカム、浅野淳博訳『イエスとその目撃者たち』2011年 C.S. Keener, <i>The Gospel of John- A Commentary vol.1</i> , 2003. J. Ramsey Michaels, <i>The Gospel of John</i> , 2010.		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 授業における発表と期末試験（指定されたテキストについての釈義ペーパー [8,000～10,000 文字]）。釈義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。レポートは共通評価指標：講義・演習によって評価する。		
＜課題に対するフィードバックの方法＞ 学生には釈義の発表を求め、教員はそれに対し批評とともにアドバイスを与える。学生はそのアドバイスに基づいて釈義を見直し、最終的に釈義レポートを完成させることを通して学習のフィードバックを行う。		

聖書神学専攻・新約聖書神学関係		授業番号 DA200004
新約聖書原典特殊研究 b	遠藤 勝信	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 通年（a, b）の登録が望ましい。	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> ヨハネの黙示録 14：14～17：06までの原典釈義。ギリシア語新約聖書のテキストを歴史的、文学的、神学的文脈に基づいて解釈する方法を学ぶ。		
<到達目標> 学生が、テキストと真摯に向き合う姿勢を学びつつ、聖書釈義の方法を修得する。		
<授業の概要> はじめに近年のヨハネ黙示録研究の動向（研究史、方法論）を概観し、釈義上の問題及び観点を確認する。その後、参加者による発表とディスカッション。釈義の正確さと共に慎重な議論の仕方、神学的掘り下げについて学ぶ合う。		
<履修条件> 新約ギリシャ語原典テキスト読解力を有すること。ギリシャ語中級文法の知識があることが望ましい。		
<授業計画> I. 講義を中心に 第01回 イントロダクション。黙示録の文学ジャンル。 第02回 黙示録を読む前に（その1）：終末思想と黙示文学 第03回 黙示録を読む前に（その2）：黙示録の執筆事情 第04回 黙示録を読む前に（その3）：黙示録の著者、読者 第05回 黙示録を読む前に（その4）：構造と構成、神学。 第06回 黙示録1章～14章までを概観し、釈義の営みにおける課題と観点を確認する。 II. 演習(参加者による発表とディスカッション)を中心に 第07回 黙示録14：14～20の原典釈義（その1：釈義と解釈） 第08回 黙示録15：01～04の原典釈義（その2：釈義と解釈） 第09回 黙示録15：05～08の原典釈義（その3：釈義と解釈） 第10回 黙示録16：01～07の原典釈義（その4：釈義と解釈） 第11回 黙示録16：08～12の原典釈義（その5：釈義と解釈） 第12回 黙示録16：13～16の原典釈義（その6：釈義と解釈） 第13回 黙示録16：17～21の原典釈義（その7：釈義と解釈） 第14回 黙示録17：01～06の原典釈義（その8：釈義と解釈） 第15回 総括		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 クラスで取り上げる新約聖書テキストをギリシア語文法に則して読み、釈義の問題点を明確にしてクラスに出席すること。		
<テキスト> Nestle-Aland (28 th ed., 2012), <i>Novum Testamentum Graece</i> 各自で購入のこと。		
<参考書・参考資料等> 佐竹明著『ヨハネの黙示録』（上・下巻）2009年 R・ボウカム著、飯郷友康・小河陽訳『ヨハネ黙示録の神学』2001年 川中仁編『宗教と終末論』（リトン）2024年 R. Bauckham, <i>The Climax of Prophecy</i> , 1993. G. Beale, <i>The Book of Revelation</i> (NIGTC), 1999. D. Aune, <i>Revelation 6-16</i> (WBC), 1997. G. R. Osborne, <i>Revelation</i> , 2002.		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と期末試験（指定されたテキストについての釈義ペーパー [8,000～10,000 文字]）。釈義ペーパーに、新約聖書学の基礎的理解及びテキストへの真摯な取り組みが反映されているかを評価。尚、出席が三分の二を満たさない場合、期末試験の受験を許可しない。レポートは共通評価指標：講義・演習によって評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 学生には釈義の発表を求め、教員はそれに対し批評とともにアドバイスを与える。学生はそのアドバイスに基づいて釈義を見直し、最終的に釈義レポートを完成させることを通して学習のフィードバックを行う。		

組織神学専攻・組織神学関係		授業番号 DB100001
教義学特殊研究 a	須田 拓	＜担当形態＞ 単独
前期・2単位	＜登録条件＞ 学期毎の登録可	
＜学位授与方針との関係＞ [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
＜授業のテーマ＞ 贖罪論の諸相を学ぶことを通して、深い教義学の理解を持つことを目指す。		
＜到達目標＞ 贖罪論について、特に現代神学にどのような議論があるのかを知り、自分の研究テーマと関連させつつ、自らこの問題について深く考えることができるようになる。		
＜授業の概要＞ 贖罪論について講義を中心としつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めてゆく。論点を整理し、古代から宗教改革期までの議論を概観した上で、現代の様々な神学者の贖罪理解を扱い、あるべき贖罪論の姿を模索する。		
＜履修条件＞ 特になし		
＜授業計画＞ 第1回 オリエンテーション 第2回 贖罪論の論点 贖罪論の類型とその問題 第3回 古代から中世における贖罪論 エイレナイオスとアウグスティヌス、アンセルムスの場合 第4回 宗教改革期の贖罪論 ルターとカルヴァンの場合 第5回 現代の贖罪論(1) ジェームス・デニーの場合 第6回 現代の贖罪論(2) ロバート・デールとピーター・フォーサイスの場合 第7回 中間総括 第8回 現代の贖罪論(3) カール・バルトの場合 第9回 現代の贖罪論(4) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第10回 現代の贖罪論(5) ユルゲン・モルトマンの場合 第11回 現代の贖罪論(6) トマス・トーランスの場合 第12回 現代の贖罪論(7) コリン・ガントンの場合 第13回 現代の贖罪論(8) ロバート・ジェンソンの場合 第14回 現代の贖罪論(9) 新しいパウロ研究における贖罪理解とそれへの応答 第15回 まとめ		
＜準備学習等の指示＞ 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく。		
＜テキスト＞ 特になし		
＜参考書・参考資料等＞ 授業において、必要に応じて指示する。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 授業における発表と意見表明、期末のレポート（6,000字程度）によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標に基づいて評価する。		
＜課題に対するフィードバックの方法＞ 個別の求めに応じてコメント、指導する。		

組織神学専攻・組織神学関係		授業番号 DB100002
教義学特殊研究 b	須田 拓	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 学期毎の登録可	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> キリスト論の諸相を学ぶことを通して、深い教義学の理解を持つことを目指す。		
<到達目標> キリスト論について、現代神学にどのような議論があるのかを知り、自分の研究テーマと関連させつつ、自らこの問題について深く考えることができるようになる。		
<授業の概要> キリスト論について講義を中心としつつ、博士後期課程の履修者による発表と意見表明を交えて進めてゆく。論点を整理した上で、現代の様々な神学者の議論を概観し、あるべきキリスト論の姿を模索する。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 キリスト論の論点(1) 上からのキリスト論と下からのキリスト論 第3回 キリスト論の論点(2) 神性と人性の関係（アレキサンドリア型とアンティオケ型） 第4回 上からのキリスト論 カール・バルトの場合 第5回 下からのキリスト論 ヴォルフハルト・パネンベルクの場合とその変遷 第6回 上からのキリスト論と下からのキリスト論(1) コリン・ガントンの場合 第7回 上からのキリスト論と下からのキリスト論(2) エーミル・ブルンナーの場合 第8回 上からのキリスト論と下からのキリスト論(3) その他の神学者の場合 第9回 中間総括 第10回 神性と人性(1) カール・バルトの場合（アンヒュポスタシアとエンヒュポスタシア） 第11回 神性と人性(2) ヴォルフハルト・パネンベルクの場合 第12回 神性と人性(3) イングランド・ピューリタンの神学者の場合 第13回 神性と人性(4) コリン・ガントンの場合 第14回 キリスト論に関するその他の論点について 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 毎回、授業で扱う人物の著作を事前に読み、講義の最後にそれに対する意見を述べられるようにしておく。		
<テキスト> 特になし		
<参考書・参考資料等> 授業において、必要に応じて指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 授業における発表と意見表明、期末のレポート（6,000字程度）によって評価する。評価にあたっては、共通評価指標に基づいて評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 個別の求めに応じてコメント、指導する。		

組織神学専攻・組織神学関係		授業番号 DB100005
弁証学特殊研究 a 宗教改革神学特殊研究 a	芳賀 力	＜担当形態＞ 単独
前期・2単位	＜登録条件＞ 博士課程後期に在籍する者	
＜学位授与方針との関係＞ [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
＜授業のテーマ＞ 公共的真理としての福音は、啓蒙主義以降の世俗化した近代社会にあって私的な事柄に成り下がっている。どうしたらもう一度福音の権威を取り戻すことができるのか、その方途を探る。		
＜到達目標＞ 世俗化した文化の中にあっても、確信を持って福音的真理を宣べ伝えることのできる力を身に着ける。自分の博士論文のテーマと関連付けて、神学的認識を深めることができる。		
＜授業の概要＞ 分担してテキストの要約を発表し、提示されたコメントを手がかりに全員で議論する。博士課程後期の学生は、議論の全体をリードするよう、心がけてほしい。		
＜履修条件＞ 組織神学専攻以外の人も履修することができる。		
＜授業計画＞ 第1回 オリエンテーション 第2回 L.Newbigin『ギリシャ人には愚かなれど』 第1章 第3回 同上 第2章 第4回 同上 第3章 第5回 同上 第4章 第6回 同上 第5章 第7回 同上 第6章 第8回 L.Newbigin『宣教学入門』 第1章、第2章 第9回 同上 第3章 第10回 同上 第4章 第11回 同上 第5章、第6章 第12回 同上 第7章 第13回 同上 第8章 第14回 同上 第9章 第15回 同上 第10章		
＜準備学習等の指示＞ 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 担当に当たっていない場合でも、前もって目を通しておくこと。		
＜テキスト＞ L.Newbigin『ギリシャ人には愚かなれど』新教出版社、2007年。同『宣教学入門』日本基督教団出版局、2010年。各自で用意する。		
＜参考書・参考資料等＞ 必要に応じて授業内で指示する。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 学期末にレポートを提出する。共通評価指標のうち、特に②と④に基づいて評価する。博士課程後期の学生として、将来の博士論文作成に資するように、その関連を吟味する。		
＜課題に対するフィードバックの方法＞ 発表については授業中にコメントする。レポートについては、個別の求めに応じてコメントし、指導する。		

組織神学専攻・組織神学関係		授業番号 DB100006																																													
弁証学特殊研究 b 宗教改革神学特殊研究 b	芳賀 力	<担当形態> 単独																																													
後期・2単位	<登録条件> 博士課程後期に在籍する者																																														
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する																																															
<授業のテーマ> ポスト・キリスト教時代にあつて、キリスト者は「寄留の他国人」であるが、そのような中で、公共の真理としての福音を物語る聖書の民の使命と課題について考える。																																															
<到達目標> 非キリス教的な文化の中にあつても、確信を持って福音的真理を宣べ伝えることのできる力を身に着ける。自分の博士論文のテーマと関連付けて、神学的認識を深めることができる。																																															
<授業の概要> 分担してテキストの要約を発表し、提示されたコメントを手がかりに全員で議論する。博士課程後期の学生は、議論の全体をリードするよう、心がけてほしい。																																															
<履修条件> 組織神学専攻以外の人も履修することができる。																																															
<授業計画> <table><tr><td>第1回</td><td>S.Hauerwas『平和を可能にする神の国』</td><td>第1章</td></tr><tr><td>第2回</td><td>同上</td><td>第2章</td></tr><tr><td>第3回</td><td>同上</td><td>第3章</td></tr><tr><td>第4回</td><td>同上</td><td>第4章</td></tr><tr><td>第5回</td><td>同上</td><td>第5章</td></tr><tr><td>第6回</td><td>同上</td><td>第6章</td></tr><tr><td>第7回</td><td>同上</td><td>第7章</td></tr><tr><td>第8回</td><td>同上</td><td>第8章</td></tr><tr><td>第9回</td><td>S.Hauerwas/W.H.Willimon『旅する神の民』</td><td>第1章</td></tr><tr><td>第10回</td><td>同上</td><td>第2章</td></tr><tr><td>第11回</td><td>同上</td><td>第3章</td></tr><tr><td>第12回</td><td>同上</td><td>第4章</td></tr><tr><td>第13回</td><td>同上</td><td>第5章</td></tr><tr><td>第14回</td><td>同上</td><td>第6章</td></tr><tr><td>第15回</td><td>同上</td><td>第7章</td></tr></table>			第1回	S.Hauerwas『平和を可能にする神の国』	第1章	第2回	同上	第2章	第3回	同上	第3章	第4回	同上	第4章	第5回	同上	第5章	第6回	同上	第6章	第7回	同上	第7章	第8回	同上	第8章	第9回	S.Hauerwas/W.H.Willimon『旅する神の民』	第1章	第10回	同上	第2章	第11回	同上	第3章	第12回	同上	第4章	第13回	同上	第5章	第14回	同上	第6章	第15回	同上	第7章
第1回	S.Hauerwas『平和を可能にする神の国』	第1章																																													
第2回	同上	第2章																																													
第3回	同上	第3章																																													
第4回	同上	第4章																																													
第5回	同上	第5章																																													
第6回	同上	第6章																																													
第7回	同上	第7章																																													
第8回	同上	第8章																																													
第9回	S.Hauerwas/W.H.Willimon『旅する神の民』	第1章																																													
第10回	同上	第2章																																													
第11回	同上	第3章																																													
第12回	同上	第4章																																													
第13回	同上	第5章																																													
第14回	同上	第6章																																													
第15回	同上	第7章																																													
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 担当に当たっていない場合でも、前もって目を通しておくこと。																																															
<テキスト> S.Hauerwas『平和を可能にする神の国』新教出版社、1992年。同『旅する神の民』教文館、1999年。教員が用意する。																																															
<参考書・参考資料等> 必要に応じて授業内で指示する。																																															
<学生に対する評価（方法・基準）> 学期末にレポートを提出する。共通評価指標のうち、特に②と④に基づいて評価する。博士課程後期の学生として、将来の博士論文作成に資するように、その関連を吟味する。																																															
<課題に対するフィードバックの方法> 発表については授業中にコメントする。レポートについては、個別の求めに応じてコメントし、指導する。																																															

組織神学専攻・組織神学関係		授業番号 DB100007
組織神学特殊研究 a 現代哲学特殊研究 a	神代 真砂実	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 特になし。	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 組織神学の代表的文献であるカール・バルトの『教会教義学』を学ぶことで、バルトの神学思想について深い理解を得、自分なりの評価を下せるようにする。		
<到達目標> ①バルトの神学的思惟の特徴を理解する。②バルトを通して、キリスト論（人性・職能・状態の問題）についての総合的な理解を身に着ける。③当該主題についてのバルト神学の貢献と問題点を理解し、自分なりの評価をレポートのかたちで説得力をもって表明できるようにする。		
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から和解論（第二部）の罪論にあたる「人間の怠慢と悲惨」（65 節）を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。		
<履修条件> 前期課程との合同（並行）授業のため、後期課程の履修者は前期課程の学生よりも常に少なくとも一歩から二歩先んじた準備が期待されている。また、議論をリードする役割も求められる。		
 <		

組織神学専攻・組織神学関係		授業番号 DB100008
組織神学特殊研究 b 現代哲学特殊研究 b	神代 真砂実	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 特になし。	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 前期と同じ。		
<到達目標> 前期と同じ。		
<授業の概要> バルトの『教会教義学』から和解論（第二部）の聖化論である「人間の聖化」（66 節）を学ぶ。テキストを精読し、その内容についての議論を重ね、また、適宜、解説を加えることで理解を深める。		
<履修条件> 前期と同じ。		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション、およびテキスト、217～237 頁（65 節 1. 義認と聖化） 第2回 テキスト、238～251 頁（65 節 2. 聖なる方と聖徒たち①） 第3回 同、251～265 頁（同②） 第4回 同、265～276 頁（同③） 第5回 同、277～294 頁（65 節 3. 随従への召喚①） 第6回 同、294～312 頁（同②） 第7回 同、313～329 頁（65 節 4. 回心への覚醒①） 第8回 同、329～349 頁（同②） 第9回 同、349～355 頁（同③） 第10回 同、355～366 頁（同④） 第11回 同、367～378 頁（65 節 5. 業の称讃①） 第12回 同、378～392 頁（同②） 第13回 同、393～409 頁（65 節 6. 十字架の誉れ①） 第14回 同、409～421 頁（同②） 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1 回の授業あたりの授業外学習は 180 分～240 分を目安とする。 前期と同じ。		
<テキスト> 前期と同じ。		
<参考書・参考資料等> 前期と同じ。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 前期と同じ。		
<課題に対するフィードバックの方法> 前期と同じ。		

組織神学専攻・組織神学関係		授業番号 DB100009
現代神学特殊研究 a	芳賀 力	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 通年の登録が望ましいが、学期毎の登録可	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 神学史上現れた神の存在証明をすべて顧みる、その上でその是非を問い直す。		
<到達目標> 神学にはテキストがある。そのテキストの読み方を教会・共同体を視座に捉えて問い直し、神学序説 (Pro-legomena) を新たに確立する。自分の博士論文のテーマと関連付けて、神学的認識を深めることができる。		
<授業の概要> 各回の最初に教員が重要なポイントとなる事項を説明するので、それに基づいて議論し理解を深める。博士課程後期の学生は、議論の全体をリードするよう、心がけてほしい。		
<履修条件> 組織神学専攻以外の人も履修することができる。		
<授業計画> 第1回 「神学の小径Ⅰ ― 啓示への問い」 第1章 第2回 同上 第2章 第3回 同上 第3章 第4回 同上 第4章 第5回 同上 第5章 第6回 同上 第6章 第7回 同上 第7章 第8回 同上 第8章 第9回 同上 第9章 第10回 同上 第10章 第11回 同上 第11章 第12回 同上 第12章 第13回 同上 第13章 第14回 同上 第14章、15章 第15回 同上 第16章、17章		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 各回、前もって目を通しておくこと。		
<テキスト> 芳賀力『神学の小径Ⅰ ― 啓示への問い』キリスト新聞社, 2009年 ※各自で用意する		
<参考書・参考資料等> 必要に応じて授業内で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 学期末にレポートを提出する。共通評価指標のうち、特に②と④に基づいて評価する。博士課程後期の学生として、将来の博士論文作成に資するように、その関連を吟味する。		
<課題に対するフィードバックの方法> レポートは、個別の求めに応じてコメントし、指導する。		

組織神学専攻・組織神学関係		授業番号 DB100010
現代神学特殊研究 b	芳賀 力	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 通年の登録が望ましいが、学期毎の登録可	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 神学史上現れた神の存在証明をすべて顧みる、その上でその是非を問い直す。		
<到達目標> 神学にはテキストがある。そのテキストの読み方を教会・共同体を視座に捉えて問い直し、神学序説 (Pro-legomena) を新たに確立する。自分の博士論文のテーマと関連付けて、神学的認識を深めることができる。		
<授業の概要> 各回の最初に教員が重要なポイントとなる事項を説明するので、それに基づいて議論し理解を深める。博士課程後期の学生は、議論の全体をリードするよう、心がけてほしい。		
<履修条件> 組織神学専攻以外の人も履修することができる。		
<授業計画> 第1回 「神学の小径Ⅱ ― 神への問い」 第1章 第2回 同上 第2章 第3回 同上 第3章 第4回 同上 第4章 第5回 同上 第5章 第6回 同上 第6章 第7回 同上 第7章 第8回 同上 第8章 第9回 同上 第9章 第10回 同上 第10章 第11回 同上 第11章 第12回 同上 第12章 第13回 同上 第13章 第14回 同上 第14章、15章 第15回 同上 第16章、17章		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 各回、前もって目を通しておくこと。		
<テキスト> 芳賀力『神学の小径Ⅱ―神への問い』キリスト新聞社, 2012年 ※各自で用意する		
<参考書・参考資料等> 必要に応じて授業内で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 学期末にレポートを提出する。共通評価指標のうち、特に②と④に基づいて評価する。博士課程後期の学生として、将来の博士論文作成に資するように、その関連を吟味する。		
<課題に対するフィードバックの方法> レポートは、個別の求めに応じてコメントし、指導する。		

組織神学専攻・歴史神学関係		授業番号 DB200001
神学史特殊研究 a	本城 仰太	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件>	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 様々な教理が、二千年にわたる信条や信仰告白の中にどのように落とし込まれているかを学ぶ。具体的なテーマは「信仰と職制」(テキストの第四章)。		
<到達目標> 多くの信条や信仰告白に触れながら(一次史料として配布する)、使徒時代、中世東方と西方、宗教改革期、その後の時代の「信仰と職制」について、論じられるようになる。また、一次史料を原典で読み、二次史料によって最新研究を用いる力を養い、関連する教理を論じられるようになる。		
<授業の概要> 毎回のテーマに関連する史料を配布しての講義、学生による発表(一人当たり2回)、ディスカッションを行う。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 ガイダンス、テキストについて、信条と信仰告白の定義 第2回 教会史における三つの職制(監督制、長老制、会衆制) 第3回 WCCの「信仰と職制委員会」、エキュメニカルのために「職制」の違いを乗り越える必要性 第4回 新約聖書時代の「信仰と職制」 第5回 2世紀と3世紀の「信仰と職制」 第6回 東方と西方の「信仰と職制」①東方と西方の職制の違い 第7回 東方と西方の「信仰と職制」②五大司教座(アレクサンドリア、アンティオキア、コンスタンティノポリス、エルサレム、ローマ) 第8回 宗教改革期における「信仰と職制」①「アウグスブルク信仰告白」を中心とするルター派 第9回 宗教改革期における「信仰と職制」②「第二スイス信仰告白」を中心とする改革派 第10回 宗教改革期における「信仰と職制」③「三九箇条」を中心とするイングランド教会 第11回 宗教改革期における「信仰と職制」④アメリカやその他の地域における教会 第12回 エキュメニズムにおける「信仰と職制」①プロイセン合同 第13回 エキュメニズムにおける「信仰と職制」②カナダ合同教会と南インド合同教会 第14回 エキュメニズムにおける「信仰と職制」③「リマ文書」 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 教会史Ⅰ～Ⅳの関連する事柄や史料をよく復習しておくこと。また配布テキストをよく読んでおくこと。		
<テキスト> J. Pelikan, <i>Credo: Historical and Theological Guide to Creeds and Confessions of Faith in the Christian Tradition</i> , New Haven and London: Yale University Press, 2003の第四章「信仰と職制」(初回の授業で訳を配布する)。その他必要な史料は授業中に配布、または指示する。		
<参考書・参考資料等> ケリー『初期キリスト教信条史』(服部修訳、一麦出版社、2011年)		
<学生に対する評価(方法・基準)> 講義の出席を前提とし、①授業での議論への積極的な参加、②授業での発表、③期末レポートによって、共通評価指標:講義・演習に基づいて総合的に評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 毎回の授業で質問を受け付け、レポートは採点后、コメントをつけて返却する。		

組織神学専攻・歴史神学関係		授業番号 DB200002
神学史特殊研究 b	本城 仰太	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件>	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> 様々な教理が、二千年にわたる信条や信仰告白の中にどのように落とし込まれているかを学ぶ。具体的なテーマは「聖書、伝統、信条」(テキストの第五章)。		
<到達目標> 数多くの信条や信仰告白に触れながら(一次史料として配布する)、聖書、伝統、信条について、論じられるようになる。また、一次史料を原典で読み、二次史料によって最新研究を用いる力を養い、関連する教理を論じられるようになる。		
<授業の概要> 毎回のテーマに関連する史料を配布しての講義、学生による発表(一人当たり2回)、ディスカッションを行う。		
<履修条件> 特になし		
<授業計画> 第1回 ガイダンス、テキストについて 第2回 信条と信仰告白の起源 第3回 聖書の中の信条①「シェマー」と「ホモウシオス」の関係 第4回 聖書の中の信条②「唯一の神を信じます」と告白している信仰告白 第5回 聖書の中の信条③フィリピ2章のキリスト論「僕の形」 第6回 信条と信仰告白の中の聖書①「証拠聖句」としての機能 第7回 信条と信仰告白の中の聖書②「聖書のみ」の原理 第8回 信仰告白と正典の問題①「正典」の範囲をどう決めるか(聖典、第二聖典、外典) 第9回 信仰告白と正典の問題②「唯一の基準」 第10回 聖書解釈の信仰告白的な基準①ニカイア・コンスタンティノポリス信条「造られず、生まれ、父と同本質」と「彼の王国は終わることがないだろう」の解釈 第11回 聖書解釈の信仰告白的な基準②教会的な基準 第12回 聖書解釈の信仰告白的な基準③聖書の歴史批評的研究と逐語靈感説の影響 第13回 聖書解釈の信仰告白的な基準④プロテスタント教会の解釈原理 第14回 聖書解釈の信仰告白的な基準⑤「信仰の基準」との関係 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 教会史Ⅰ～Ⅳの関連する事柄や史料をよく復習しておくこと。また配布テキストをよく読んでおくこと。		
<テキスト> J. Pelikan, <i>Credo : Historical and Theological Guide to Creeds and Confessions of Faith in the Christian Tradition</i> , New Haven and London : Yale University Press, 2003 の第五章「聖書、伝統、信条」(初回の授業で訳を配布する)。その他必要な史料は授業中に配布、または指示する。		
<参考書・参考資料等> ケリー『初期キリスト教信条史』(服部修訳、一麦出版社、2011年)		
<学生に対する評価(方法・基準)> 講義の出席を前提とし、①授業での議論への積極的な参加、②授業での発表、③期末レポートによって、共通評価指標：講義・演習に基づいて総合的に評価する。		
<課題に対するフィードバックの方法> 毎回の授業で質問を受け付け、レポートは採点后、コメントをつけて返却する。		

組織神学専攻・実践神学関係		授業番号 DB300003
キリスト教教育特殊研究 a	長山 道	<担当形態> 単独
前期・2単位	<登録条件> 学期ごとの登録可	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> キリスト教教育に関する宗教改革期の著作を読み、今日の教育や教会に与えた意義の大きさを知る		
<到達目標> 宗教改革期の文書を理解し読みこなせるようになる。プロテスタンティズムが現代まで教育に与えている影響力を理解し、今日のキリスト教教育がどうあるべきかを考察できるようになる		
<授業の概要> テキストを精読し、いくつかの発問に回答して理解を深め、ディスカッションを行う		
<履修条件> 教会もしくはキリスト教学校においてキリスト教教育の経験がある者		
<授業計画> 第1回 「キリスト教界の改善に関してドイツのキリスト者貴族に宛てて」 1 “霊的階級”の問題 第2回 「キリスト教界の改善に関してドイツのキリスト者貴族に宛てて」 2 改革の必要性 第3回 「キリスト教界の改善に関してドイツのキリスト者貴族に宛てて」 3 廃止されるべきこと 第4回 「キリスト教界の改善に関してドイツのキリスト者貴族に宛てて」 4 悪しき習慣 第5回 「キリスト教界の改善に関してドイツのキリスト者貴族に宛てて」 5 大学の改革 第6回 「キリスト教界の改善に関してドイツのキリスト者貴族に宛てて」 6 信仰者の生き方 第7回 「ドイツ全市の参事会員に宛てて、キリスト教学校を設立し、維持すべきこと」 1 学校設立の理由 第8回 「ドイツ全市の参事会員に宛てて、キリスト教学校を設立し、維持すべきこと」 2 聖書の重要性 第9回 「ドイツ全市の参事会員に宛てて、キリスト教学校を設立し、維持すべきこと」 3 救いのための学校 第10回 「人々は子どもたちを学校へやるべきであるという説教」 1 背景と課題 第11回 「人々は子どもたちを学校へやるべきであるという説教」 2 礼拝（神奉仕）への教育 第12回 「人々は子どもたちを学校へやるべきであるという説教」 3 霊的な益と害 第13回 「人々は子どもたちを学校へやるべきであるという説教」 4 この世的な益と害 第14回 「人々は子どもたちを学校へやるべきであるという説教」 5 学校の意義 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 テキストを熟読してくること。不明な点は調べておくこと		
<テキスト> 『ルター著作集』第一集第二巻、第九巻（聖文舎、1963年、1973年）、ルター研究所編『ルター著作選集』（教文館、2005年）。担当者が準備する		
<参考書・参考資料等> 金子晴勇『教育改革者ルター』（教文館、2006年）		
<学生に対する評価（方法・基準）> ディスカッションによって、共通評価指標(1)①～③に基づき評価する		
<課題に対するフィードバックの方法> 解説、講評、個別のコメントをする		

組織神学専攻・実践神学関係		授業番号 DB300004
キリスト教教育特殊研究 b	長山 道	<担当形態> 単独
後期・2単位	<登録条件> 学期ごとの登録可	
<学位授与方針との関係> [DP1] 自立した研究活動により神学における国内外の学界への学問的貢献ができるレベルの専門的学識を修得する		
<授業のテーマ> キリスト教教育に関する現代の著作を読み、今日の教会やキリスト教学校における教育について考察する		
<到達目標> 現代におけるキリスト教教育の課題と展望を理解し、福音主義に立つキリスト教教育の意義と方法を論じられるようになる		
<授業の概要> テキストを精読し、いくつかの発問に回答して理解を深め、ディスカッションを行う		
<履修条件> 教会もしくはキリスト教学校においてキリスト教教育の経験がある者		
<授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回 世界の秘密を見つめる子どもたち 第3回 それは子どもにどうしても必要ですか 第4回 成長過程で抱く子どもの五つの大きな問い 第5回 宗教教育は子どもの自立の妨げか 第6回 …それで、どの宗教のことなのか 第7回 自分自身の宗教的社会化 第8回 疑問と不信の念 第9回 子どもは自分で決める権利をどの程度まで持っているか 第10回 子どもの神学とは 第11回 子どもは聖書を理解できるか 第12回 「子どもとともに祈る」とは 第13回 子どもは教会を必要としているか 第14回 今後に向けての展望 第15回 まとめ		
<準備学習等の指示> 1回の授業あたりの授業外学習は180分～240分を目安とする。 テキストを熟読してくること。不明な点は調べておくこと		
<テキスト> フリートリヒ・シュヴァイツァー（吉澤柳子訳）『子どもとの宗教対話』（教文館、2008年）。担当者が用意する		
<参考書・参考資料等> Friedrich Schweitzer, Das Recht des Kindes auf Religion. Ermutigungen für Eltern und Erzieher. Gütersloh 2000 (2. Aufl. 2019)		
<学生に対する評価（方法・基準）> ディスカッションへの貢献度によって、共通評価指標(1)①～③に基づき評価する		
<課題に対するフィードバックの方法> 解説、講評、個別のコメントをする		

聖書神学専攻		授業番号 DC100001
博士論文指導演習聖書神学 a	各指導教授	＜担当形態＞
前期・0単位	＜登録条件＞ 博士論文指導演習聖書神学 b と通年で登録すること。	
＜学位授与方針との関係＞ [DP2] 高等教育機関において研究者・教育者として継続的に研究業績を出すことのできる能力を身に付ける		
＜授業のテーマ＞ 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。		
＜到達目標＞ 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。		
＜授業の概要＞ 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
＜履修条件＞ 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。		
＜授業計画＞ 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
＜準備学習等の指示＞		
＜テキスト＞		
＜参考書・参考資料等＞		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞		
＜課題に対するフィードバックの方法＞		

聖書神学専攻		授業番号 DC100002
博士論文指導演習聖書神学 b	各指導教授	＜担当形態＞
後期・ 0 単位	＜登録条件＞ 博士論文指導演習聖書神学 a と通年で登録すること。	
＜学位授与方針との関係＞ [DP2] 高等教育機関において研究者・教育者として継続的に研究業績を出すことのできる能力を身に付ける		
＜授業のテーマ＞ 学生各自の研究課題に従い、文献の講読や討論などを通じて博士論文を作成する。		
＜到達目標＞ 世界的レベルの聖書学論文が書けるようになる。		
＜授業の概要＞ 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容などについて指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
＜履修条件＞ 博士課程後期課程に在学する聖書神学専攻者。		
＜授業計画＞ 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。		
＜準備学習等の指示＞		
＜テキスト＞		
＜参考書・参考資料等＞		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞		
＜課題に対するフィードバックの方法＞		

組織神学専攻		授業番号 DC200001
博士論文指導演習組織神学 a	各指導教授	<担当形態> 単独
前期・0単位	<登録条件> 博士論文指導演習組織神学 b と併せて通年で登録すること。	
<学位授与方針との関係> [DP2] 高等教育機関において研究者・教育者として継続的に研究業績を出すことのできる能力を身に付ける		
<授業のテーマ> 学生各自の研究課題に従い、博士論文のテーマを設定し、研究を深め、論文を執筆する。		
<到達目標> 第一次文献の読解や第二次文献との対論を通して、具体的に博士論文の（部分的）作成に寄与する。		
<授業の概要> 各自の研究課題に沿って、諸文献の検討、論文のテーゼや構成・内容・表現などについて、指導教授と対話しつつ、博士論文の作成にあたる。		
<履修条件> 博士課程後期課程に在学する組織神学専攻者。		
<授業計画> 各指導教授が年度初めに配付する「研究指導計画書」に拠る。 博士論文の共通評価指標を参照しながら指導する。		
<準備学習等の指示> 小まめに指導教授と面談し、指導・助言を受けるようにすること。		
<テキスト> 面談の中で指示する。		
<参考書・参考資料等> 面談の中で指示する。		
<学生に対する評価（方法・基準）> 博士論文の共通評価指標に従う。		
<課題に対するフィードバックの方法> 適宜、指導する。		

組織神学専攻		授業番号 DC200002
博士論文指導演習組織神学 b	各指導教授	＜担当形態＞
後期・0単位	＜登録条件＞ 博士論文指導演習組織神学 a と併せて通年で登録すること。	
＜学位授与方針との関係＞ [DP2] 高等教育機関において研究者・教育者として継続的に研究業績を出すことのできる能力を身に付ける		
＜授業のテーマ＞ 前期（博士論文指導演習組織神学 a）と同じ。		
＜到達目標＞ 前期（博士論文指導演習組織神学 a）と同じ。		
＜授業の概要＞ 前期（博士論文指導演習組織神学 a）と同じ。		
＜履修条件＞ 前期（博士論文指導演習組織神学 a）と同じ。		
＜授業計画＞ 前期（博士論文指導演習組織神学 a）と同じ。		
＜準備学習等の指示＞ 前期（博士論文指導演習組織神学 a）と同じ。		
＜テキスト＞ 前期（博士論文指導演習組織神学 a）と同じ。		
＜参考書・参考資料等＞ 前期（博士論文指導演習組織神学 a）と同じ。		
＜学生に対する評価（方法・基準）＞ 前期（博士論文指導演習組織神学 a）と同じ。		
＜課題に対するフィードバックの方法＞ 前期（博士論文指導演習組織神学 a）と同じ。		